



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	プルードンにおける分業と機械:マルクスのプルードン批判について
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	北海道大學 經濟學研究, 12(1), 31-68
Issue Date	1962
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31084
Type	departmental bulletin paper
File Information	12(1)_P31-68.pdf



ブルードンにおける分業と機械

——マルクスのブルードン批判について——

佐藤 茂 行

目 次

は し が き

I ブルードンの方法論

II ブルードンの価値論と分業および機械

III 分業と機械との関係

IV マルクスのブルードン批判

は し が き

マルクスの『哲学の貧困』（一八四七年）が、フランスの社会主義者ブルードンの、『経済的諸矛盾の体系——貧困の哲学——』（一八四六年）に対する批判の書であることは周知の事実である。ところで、このマルクスの著作が、彼の経済学説形成過程において如何なる位置を占めているかは、必ずしも明らかではない。とくに、一八五〇年代の『経済学批判』のための研究と『哲学の貧困』が如何に結びつくかを指摘した、説得的な見解をわれわれは未だ知らない。このことは、プラン問題を一つの契機とした一八五〇年代のマルクスの経済学研究についての検討が、一方で進展した

のに対し、『哲学の貧困』でのブルードン批判の意義が、未だマルクスの学説形成過程の中で、真に把握されていないことを意味する。

かかる把握の欠除の最大の理由は、マルクスが批判の対象としたブルードンの著作内容についての分析を、われわれがかつて行なわなかったことにあると思われる。⁽¹⁾このことから本稿では、ブルードンの『経済的諸矛盾の体系』での方法論と、分業および機械論を中心にして、ブルードン経済理論体系の特質についての解明を試みた。

われわれは、これによって、ブルードン批判のマルクスの学説形成過程での意義と、『哲学の貧困』の位置についての理解を深めることができるであろう。本稿では、この点について、最後にふれておきたい。

I

『哲学の貧困』でのマルクスの批判から、爾来、ブルードン経済学体系の方法的基礎は、ともすれば、ブルードンが極めて不完全に理解したヘーゲル主義にある、とみられがちである。⁽²⁾しかし、かかる見方は皮相的と云わねばならない。何故ならば、ヘーゲル主義の影響がもつとも大きいとされる『経済的諸矛盾の体系』においてすら、その内容を検討するならば、その実質的な論理構造は、ヘーゲルではなく、ブルードン独自の方法論にもとづいているからである。つまり、そこでのヘーゲル主義は、まさに「ミステイフィケート」⁽³⁾されたものにすぎない。そこで、われわれは、かかるブルードンの経済学体系の実質的基礎としての方法を把握するために、その方法論が展開されている同じブルードンの『人間性における秩序の創造について』⁽⁴⁾（一八四三年）の中での、「系列の理論」なるものを分析、検討して、その中心の特徴を提示することにした。

ブルードン経済学体系の基礎となっている方法論は、「系列⁽⁵⁾ (serie) の理論」⁽⁵⁾と云われるものである。この理論の形成に当って、ブルードンは、系列という考⁽⁶⁾え方の素材を初期フランス社会主義者のフリーエから継承し、ドイツ哲学の

カントによつて理論化を行なつてゐると云える。

フリーエには情念引力の原理と呼ばれるものがあり、これは社会的運動または社会構成の原理に当る。ここでは情念なるものが一定の系列をなして發展するものとされている。フリーエにあつては、系列を算術級数としてとらえる数的な發想をその根底にもつてゐるが、この系列という概念は、かかる数的發想から導き出されたものに他ならない。何故ならば、数においては、同一性をもつた単位（一）の間の引力と斥力との関連から、容易に連続性の概念がえられるからである。そして系列とはまさに、かかる連続性の一つの表現にすぎない。

しかるに、ブルードンが、この系列という考へ、素材の理論化に當つて適用したと思われる、カントの先天的綜合判斷における量のカテゴリーとは、こうした連続性を自己のうちに含んだものに當る。この様にみるならば、系列の素材自身、すでに量のカテゴリーによる理論化を必要としていたものと云える。

ところで、フリーエのかかる素材をカントのカテゴリーによつて量的關係として理論化するといった、上述の如き「系列の理論」の成立条件は、この理論の基本的性格を規定する。すなわち、(一)、実体的なもの、本質的なものの否定、(二)、外面的な同一性の把握。

量またはその完全な規定性をもつたものとしての数を基礎とする限り、系列は本質のない關係にすぎない。何故なら、数は、一体に、外面的に結合された何らの内面的連關をもたない、全く分析的な形象にすぎないからである。まさしく、ブルードンの系列の方法は、系列の間に何らの必然的連關をもたない、並列的な論理構造をもつてゐる。そして、そこには系列を必然たらしめる実体的なもの、質料的なものによる關係は排除されてゐるのである。同様に、数における単位としての一は、同一性、しかも外面的な同一性を前提してあり、ここから、系列の間の關係はこうした外面的同一性によつて規定されることとなる。

かくして、系列は、内的な必然性（実体的な本質把握）をもたない、外面的または抽象的同一性の関係としてとらえられるのである。

以上の基本性格を、次にブルードンの説明の中で検討してみよう。

ブルードンによれば、すべての既成の進歩する諸科学における対象は、「系列、すなわち差異、区分と下位区分(sous-section)、群および下位群(sous-groupe)そして属(genres)と種(especes)への分割である」とされ、それは段階分け、結節づけ(articule)または組織づけ、体系づけされたものであり、「こうした数え切れない多くの差異をもった形象」が系列と呼ばれる。こうして従来の諸科学は、自然の中にかかる系列を見出してきたが、この様な対象の系列づけ(setiation)がまさに科学のはじまりとされる。⁽¹⁹⁾

そこで、ブルードンによれば、少なくともその原理においても古く構成された科学は算術(Arithmétique)とされ、直線のイメージのもとで無限を考えると不分明、不可解であるが、その代り、点の連続ということでは無限を考えると、一つの新しい概念に到達できる。それは、数の概念である。そしてこの数の概念から複数性(群)と分割が導き出される。何故なら、数は分割された量であり、無限に区別されたものだからである、とされる。こうして、これから分割と群分けという系列の方法の二つの基本条件を規定しているのである。⁽²⁰⁾

さて、以上の基本的考え方に立つて、ブルードンは系列はその要素として、単位(unite)をもっており、系列とこの単位との関係は、群と分割されたものとの関係であると考えている。このことは、カントにもとづく系列の理論化とみられる。単位、概念の成立過程の説明から知られる。

すなわち、そこでは次の様なことが述べられている。まず、一つの規定された全体性(totalité)または限界づけられた群、すなわち系列の区別が行なわれ、次にこの全体性の中で諸部分の認識がなされる。その結果、数多性(pluralité)

の概念をうる。そしてここから、これらの諸部分を結合しているものが同一性の関係にあることの把握によつて、單位の概念に到達する。こうして「諸單位の一つの群であるところの系列によつて、……量(quantité)の概念がえられる」が、このことによつて、「量・全体性・数多性・單位は、論理的な定式であり、……すべての系列の一般法則である。」とされる。⁽¹⁸⁾

この様に、系列の基本構造は、分割による單位、それらの集合としての群によつて形成されているのである。そしてこの基本構造を支えているものは、数の概念であることはすでにみた通りである。ところで、数は一(單位)を原理とするところから、外面的に結合された形象であり、互に無関係な諸單位を統一した外的總括にすぎない。したがつて、かかる数的なものを基礎概念として構成された系列も、何らの内面的連関をもたない、したがつて實體をもたない關係にすぎない。

このことからブルードンが次の如く述べるのは必然である。「ニュートンによれば、数とは關係である。数学を他から區別する第一の事柄は、それが實體とか原因とかに關する思弁を斷つことにある。……すべての現存する、また今後生まれるすべての科学は諸系列の計算にすぎない」とし、「系列は、決して実体的なものではなく、それは秩序であり、諸關係の全体または法則である。」⁽¹⁹⁾

以上からわれわれは、数的概念を基礎とした系列の方法の第一の特徴として、實體または本質の拒否という立場をみることができる。

次に同様に、系列の方法が關係概念を示す場合、同一性にそれを帰着させる理由も上述の説明からひき出される。

すなわち、ブルードンによれば、群を形成するところの諸單位は、同一なもの、差異のないものであり、就中、「絶對的な單位は、諸物の中にあつて、差異のない、區別のないものであり、同一性である。」⁽²⁰⁾

これは、数のモメントの一つとして単位が、互に同等なものであることから説明されうる。系列は、連続性の一つの表現であることはすでに指摘したが、実はこの連続性は、同一の単位の統一によって成立するのである。⁽¹⁹⁾

かくて、同一性が系列の不可欠の条件であることが理解できるが、前述の、実体的なものの否定、外面的な区別と結合は、かかる同一性と表裏をなす様な必然的連関をもっている。

何故ならば、ここで問題となつてゐる区別（関係）は、あくまでも量的な規定性であり、単に比較を行なうところの外的反省にすぎないが、この比較とは、現存している区別を同一性へ還元することに他ならない。⁽²⁰⁾したがって、ここには実体的なものを媒介とした関係の排除がある。

かくて、実体否定と同一性による関係の把握という系列の特徴は、相互に関連し合つたものであることが理解される。

ところで、以上の二つの特徴は、系列の方法を潜在的に規定するものではあつても、ブルードンがこの方法を経験諸科学の方法として考察する場合にはそのままでは適応されえない。というのは、それは量的規定性しかもっていないからである。そこでブルードンは系列の方法の具体的な適応を、自然科学、とくに、動物学・植物学における分類の方法の中に見出している。⁽²¹⁾そして、われわれは、系列の方法の二つの特質が、この分類の方法と見事に結びつくのを見る。すなわち、実体否定のそれは、分類の方法の現象記述的性格と。また同一性による関係の把握は、分類に際しての抽象的同一性の把握と。

さて、以上の系列の理論は、実は「系列の弁証法」という、新しく構成されるブルードンの経済学の方法の基礎理論なのである。われわれは、そこで、これまでみた、数的発想と、それと結びつけられた分類の原理とによって規定された、この「系列の弁証法」なるものを検討しておこう。

経済学の方法としての系列の弁証法は、上述の系列の理論をもとにして構築されている。そして、それは、これまで分析した系列の、体系についての理論と云える。したがって、この系列の体系のもので、われわれは、系列の方法における二つの特質がより展開したかたちで問題とされるのを見ることが出来る。

系列の弁証法は、弁証法的系列およびその体系を対象とする。この系列を構成する項 (termes) または単位は、それ自身、論理的系列と呼ばれる。この論理的系列とは、結局、抽象化、一般化によって得られたものである。⁽²³⁾ そしてこの抽象化とは推理 (ブルードンにとっては、これは分類を意味する) ⁽²⁴⁾ によって、同一性の関係を見出すことに他ならない。したがって、論理的系列とは、分類の原理にもとづいた、抽象的同一性の関係によって構成された系列のことである。

さて、弁証法的系列は、かかる論理的系列を単位とした、これまた一つの論理的系列に当るものである。⁽²⁵⁾ かくして、弁証法的系列は、抽象されたものを更に抽象するといった、云わばブルードンの観念的系列に属する。⁽²⁶⁾

かくて、弁証法的系列の基本特徴は、単位 (論理的系列) が、抽象的同一性の関係によって結びつけられていることにある。このことから、第一に、諸単位は同一なものであるが故に、それらを置換することは、系列の形態を変えることにはならない、という見方が生まれる。ブルードンは「弁証法的系列の項の間には、前であるとか、後であるとかの如何なるつながりもなく、少なくとも原因、結果の如何なる関連もない」と述べているが、⁽²⁷⁾ けだし、これは、系列の關係が、同一性による連続によって生じている限り当然の見方として理解できる。

同様に、第二として、同一性の追求に当っては、区別が前提されているが、ここから弁証法的系列は、不調和な、異質的な諸事物の間に、こうした同一性の關係を発見するものであり、それは「もつとも不調和な対象を集める」という見方が生ずる。⁽²⁸⁾ ブルードンが「矛盾した關係としての弁証法的系列、その特殊な理論としての系列の弁証法」と

云う場合の、矛盾した関係 (rapport inassociable) とは、かかる意味での不調和、異質性を指すものと云える。したがって、矛盾した関係と云つても、それは同一性に対応した、差別にすぎないものである。⁽²⁹⁾ これは系列の弁証法のきわめて注目すべき特徴と云わねばならない。

さて、系列の弁証法は、高次の段階では、体系的な弁証法的系列を対象とする。すなわち、ここでは素材を異にするいくつかの弁証法的系列の集合が問題とされる。そして、この集合が一つの複合的な系列とみなされる。ブルードンはそれを体系 (système) あるいは表 (tableau) と呼んでいる。⁽³⁰⁾ しかも、弁証法的系列が、抽象によってえられた論理的系列をその単位とするところからそれ自身、観念的な系列であつたと同様に、かかる弁証法的系列の複合体としての系列の体系も、またそのすぐれた例を精神の発展の中にみることができるとしている。⁽³¹⁾

ところで、この組織的な系列である、系列の体系は如何なる構成をもっているか。

「構成された、あるいは体系的な系列は、数多くの形態によつて感知される。並列または段階分け……は、推理の操作にとつては、もつとも普通のかたちであり、その中で、主題の分割と再分割がなされる」とされる。⁽³²⁾ この様な規定と、ブルードンにおいては体系を構成する各系列が、唯一の主題にもとづく変換式として理解されていることとを合わせて考えるならば、体系を構成する関係は、ある主題をもとした同一性の追求によつて成立していることがわかる。したがつて、この体系における諸項 (単位としての弁証法的系列) の関係が、進歩の関係である、とブルードンが述べる⁽³³⁾ときも、それは一つの主題にもとづく同一性の連続を考えているものと云えよう。こうして、体系においても、系列の弁証法の前述の特徴が貫徹していることは明らかである。

さて、これまでの検討によつて、ブルードンの方法である系列の弁証法が、分類の原理にもとづく、同一性の追求という、現象の一面的な抽象による一般化と、それにもとづく体系化の方法であること、そしてそれは同時に、実体

の欠除によって裏付けされていることが明らかとなった。

ところで、最後に、ヘーゲルとの関係にふれておく。

系列の理論では、すでにみた通り、いわば仮象の一般化という、経験主義的、実証主義的立場が強調されているが、一方、ブルードンは、すでに『財産とは何か』（一八四一年）で、平等・正義に対する倫理的要請を理論化していた。『諸矛盾の体系』では、かかる平等・正義の理念と、系列の理論との統一が問題となる。ヘーゲルが導入されるのはこの段階においてである。³⁵しかし、ヘーゲルはブルードンの実質的論理構造にまでくみ込まれることはなく、もっぱら、その観念論的言辭が主として、こうしたいわば二元論の観念的統一の粉飾に役立っているにすぎない。そして、その実質的統一は、われわれが本節でみた系列の体系の方法によってなされている。われわれは、それを次節以降の分析を通じてみることにしたい。

II

われわれは、上述の方法論の特徴が、ブルードンの経済学体系の中で、価値論を媒介にして如何に展開されるかをみることにする。

そこで、まず実体否定の立場が、分業および機械論と価値論との関連で如何に貫徹されているかを分析しよう。

ブルードンは、経済現象を一つの体系として把握している。彼はそれを経済的諸矛盾の体系、あるいは二律背反(aninomie)の体系と考える。そして、この体系とは、すでにみた系列の体系に他ならない。³⁶しかも、これはブルードンによれば、経済的進化の系列、すなわち歴史的系列によって構成された体系と考えられている。³⁸分業および機械は、かかる経済的進化の系列の第一、ならびに第二の時期(époque)または局面(phase)として位置づけられる。この

様に、分業・機械は一つの体系的な系列のモメントであり、それ自身体系を構成する系列またはカテゴリーである。

さて、かかる系列の体系のモメントとしての分業・機械は、ブルードンの価値論と如何に連関するか。まず、そのブルードンの価値論を検討しておく。

ブルードンの価値論では、いわゆる構成された価値 (la valeur constituée) が問題とされる。この価値は、まず需給の一致によつて生ずる市場価格の一種であり、一つの均衡価格⁽³⁹⁾である。ブルードン自身、この構成された価値が、A・スミスの自然価格において「直観的に認識されていた」と述べていることから、これはおそらく、スミスの自然価格に想を得たものであらう。実質的には、この価値は、スミスの自然価格よりもむしろ、これを徹底させた J・B・セーの価格に近いものと云える。⁽⁴¹⁾

ところで、構成された価値は、実はかかる自然價格的側面をもっているということであつて、自然價格のことではない。すなわち、ブルードンによれば、需給の均衡をもたらす力 (force) として労働が考えられており、この労働は生産物において実在化し、時間によつて計測されるものとされているからである。⁽⁴²⁾

構成された価値は、このことから投下労働說的側面、すなわち価値法則に関連する側面をもっている。このことは支配労働説に立つ市場価格としての側面と相容れないものと云わねばならない。

この様に、構成された価値が、市場価格と価値という、論理構造の違ったものを含む混乱した概念となつた理由は、等労働量交換における均衡を媒介にして、投下労働と支配労働を混同視したことにある。そこで、構成された価値の、ブルードンの理論体系での位置を把握するために、その混同視の過程をみておくことにする。

この説明のためには、まず、構成された価値の基礎がすでに確立している『財産とは何か』⁽⁴³⁾での立場にふれねばならない。

ブルードンはこの著作の中で財産批判の展開に当って、スミスのいわゆる「初期未開の社会状態」をもとにしたしかし、スミスとはかなりの違いをもったブルードン独自の理想化した状態を前提している。これによると、その状態のもとでは平等が支配しており、等しい労働量をもった生産物が交換される。そしてそこでは、各人は労働の自然的報酬としての賃金を平等にうるものとされる。⁽⁴⁴⁾

この場合同時に、「生産物は生産物によって買われる」というセーの立場が承認され、需給一致が前提されている。⁽⁴⁵⁾ところでこの状態での需給一致は、競争の結果として得られたという認識はなく、最初から、かかる結果としての一致を、平等の観点から前提しているのである。⁽⁴⁶⁾

ともあれ、以上の如き、小商品生産者の社会を理想化した状態での労働が、時間によって尺度されると考えることは、ブルードンにおけるスミスの地位からして困難ではない。⁽⁴⁷⁾

かくして、構成された価値の、価値的側面は、上述の如き問題設定から生まれたものと云える。

ところで、ブルードンのこの構成された価値は、自然に任せる限り現実の経済のもとでは成立しえないと考えられている。これは、現実の社会では平等が普遍化していないとするブルードンの立場からくるものである。⁽⁴⁸⁾

さて、構成された価値は前述の如く、一方では均衡価格としてとらえられている。これは、すでにみた等労働量交換における需給一致の立場の現われとみることができる。したがって、構成された価値の不成立が前提される以上、現実の経済においても需給一致による均衡はありえないと考えられる。

ここから、たえざる均衡の破壊として現実の経済現象をとらえるブルードンの見方が生ずる。

しかし、後にみる如く、かかる現実の経済の説明に当って、ブルードンは、スミスの市場価格、あるいはセー的価格論に立つてそれを行なっている。この立場は、等労働量交換における均衡とは異なったものである。というのは、

その場合ブルードンが根拠にしている市場価格の一種としての自然価格は、それを構成している費用としての賃金・利潤および地代の自然率をめぐって一つの均衡に到達するものだからである。これはしたがって、ブルードンが想定した理想状態での均衡とはその内容を異にするものと云わねばならない。

かかる混乱は何故生じているのか。それは次のことから導かれたものと思われる。

すなわち、ブルードンが、さきに、理想状態を設定して、結果としての需給一致を、平等の観点から想定し、セー法則を承認したときすでに、投下労働と支配労働の混同を行なっていたということである。つまり、「生産物が生産物によって買われる」ということの中で、ブルードンは生きた労働（賃金）と対象化された労働（生産物）を混同視していたものと思われる。これはブルードンが『財産とは何か』において、労働と生産物の均衡ということさえ述べていることから明らかである。⁽⁴⁾ともあれこのことは、価格構成説にもとづく市場価格によって現実の経済現象を説明するブルードンの立場を容易に導く。かくして、等労働交換での均衡と自然価格が混同されることとなったのである。

以上の経過によつて、ブルードンの構成された価値は、ミスがその関係を何ら説明しないままに並置した、二つの独立したカテゴリーとしての市場価格と価値とを一つの価値概念としたものと云える。

この様に、構成された価値は、市場價格的側面と価値的側面とをもった奇妙な構成概念と云えるが、かかる両側面は混同されてはいても、論理的必然性をもつて結びついたわけではないので、ブルードンの理論体系の中ではこれまた奇妙な役割をはたす。

すなわち、ブルードンの理論体系にあつては、現実の経済現象の説明に当って、市場價格的側面がもつばら、その分析のよりどころとなり、これに対して、価値的側面は、理想価格（価値）としての面のみが問題とされ、それはプ

ルードンの理想社会の価値として、いわば正義と平等の具象⁽⁵³⁾としての役割に後退する。

われわれは、まず、その前者と分業および機械の關係について検討することにしよう。

経済現象の系列のモメントとしての分業・機械は、この構成された価値の市場價格的側面によつて経済學的把握がなされているのであるが、それによると、まず、ブルードンは、分業にもとづく協業によつて生産力が増大し、生産物量が増加する分業の効果を次の如く説明する。

資本家は、労働者が分業による協業によつて生み出す力、すなわち集團力(*force collective*)に対して支払わない。つまり資本家は労働者の個々の労働日に対しては支払つても、結合労働日に対しては支払わないからであると。

これはブルードンの「計算違い(*erreurs de compte*)の理論」と云われるものであるが、それは次の様な理由による。

すなわち、協業による生産力の増加により、同一労働量に対して、より多くの生産物が生産されるが、この場合、賃金が以前と同じ一労働日分だけ支払われるものとする、それによつて、新しく生産された生産物の價格に占める賃金部分の費用は低下する。この結果、資本家は自己が投じた費用を上まわる利益(*benefice*)を得る、というのである。⁽⁵⁴⁾

ところで、この利益はどこから生ずるか。われわれは、この直接的な説明をブルードンから引出すことはできないが、この理論が最初に展開されている『財産とは何か』でのブルードンの立場を合わせて検討するならば、この資本家の得る利益の源泉は流通過程に求められていることがわかる。すなわち、前述の如く、ブルードンにおいては労働を媒介にして賃金(「生きた労働」と生産物(「対象化された労働」とが混同されているから、新しい生産物における労賃部分の費用を上まわる利潤・地代部分の源泉は、この場合、支配労働説の見解に立つた、「労働者は自己の生産

した生産物を買ひ戻しえない」あるいは、資本家（「財産」）は労働者に「その生産物を、それがその生産物に支払ったより以上に高く売る」⁽⁵⁵⁾からだという、いわば交換過程に利潤を求める立場によって解決される。

この説明の立場が明らかに価格構成説に結びついていることは詳言するまでもない。

こうして、以上から労働の剰余・利潤は、構成された価値の支配労働説にもとづく価格構成説、すなわち市場価格の側面から説かれていることが理解される。

われわれは次に、賃金低下・失業等をもたらす分業・機械の消極的、否定的効果の説明を検討してみよう。機械論についてみることにする。

ブルードンの機械論は、いわゆる補償説批判の立場である。まず、ブルードンの説明によると、何人かの経済学者は、機械によって排除された労働は、長期的には、その機械の導入から生ずる価格低下による生産物の需要の増大と、労働に対する需要の増加によって吸収されるとするが、「確かに時間の経過とともに均衡は成立するかも知れない。しかし、やはりそれにしても均衡がその点について成立することはないだろう。何故なら、発明の精神 (*l'esprit d'invention*) が労働におとらず止まることがないからである。」⁽⁵⁶⁾とされる。これを具体例の説明を追ってみると次の如くである。

鉄道の導入によって運搬価格が二五パーセント下つたとすると、すべてこの鉄道に結びついた産業の収入 (*le revenu*) も同じだけ下る。ということは、従来運搬業で生活していた人の四分の一が生活を失うことである。かかる欠除 (*deficit*) が満されるためには、一つだけ希望がある。それは有効運搬量が二五パーセント増加することである。さもなくば他の産業に雇われることである。しかし、「そうしたことは、まず不可能であろう。というのは、仮定および事実⁽⁵⁷⁾によって雇傭は至るところに満されており、至るところ釣り合いが守られており、供給は需要を満しているから

である。⁽⁵⁸⁾かくて「機械によつて労働が人間を欠除しなければならぬのみか、人間もまたその数を減らされ、消費も不充分となることによつて機械を欠いているのである。つまり、均衡が成立するまでの間に、労働・人手・生産物そして販路の欠除が同時に存在している。……人間と機械は相互に追いつき合ひ、前者は休息に到達できず、後者は満⁽⁵⁹⁾されることがない」と。

さて、われわれは、ブルードンの価値論の均衡價格的側面が、スミスの市場價格、さらにはそれを徹底させたセーの價格論と同じものであることをすでにみたが、以上のブルードンの補償説批判が、明らかにセー法則にもとづいた價格論の立場からのものであることがわかる。このことから、ブルードンの補償説批判は、実は補償説と同一の立場に立つての批判にすぎないことは明白である。

すなわち、ブルードンの批判は、補償に至る過程の一段階としての不均衡状態を、価値的観点がないところから、「発明、精神」を媒介にして一般化し、それをもつて批判としたのである。したがつて、ブルードンの機械論は排除説というには極めて不完全なものであり、理論的立場は補償説とみるべきであらう。

ともあれ、以上の検討から、ブルードンの機械の否定的効果もまた価値論との関連においては、その市場價格あるいは均衡價格的側面によつて説明されているのを見ることができよう。

以上の如く、系列のモメントとしての分業・機械は、いずれも市場價格的側面、すなわち質的なものを根拠とせず、内的連関の把握を欠いた、いわば仮象の量的側面のみを一般化し、理論化した價格によつてとらえられている。そしてそこでは実⁽⁶⁰⁾体としての価値的側面は問題となりにえない。

かくして、前節でみたブルードンの方法論における実体否定の立場は、構成された価値との関連では、体系的系列の局面としての分業・機械のカテゴリーの価値的側面による把握の欠除を通じて貫徹していることがわかる。

さて、実体的なもの、すなわち価値による把握を欠除した系列としての分業・機械は、何を媒介にして連関するであろうか。

われわれは、次に構成された価値の、価値的側面と分業および機械との関連を検討しなければならない。

III

ブルードンの経済的系列の体系における第一の局面が分業であることはすでにふれたが、ブルードンがその理論体系の出発点に分業を置いた理由は、「分業は、それによつて諸条件、および知性の平等が実現される方法 (le mode) であり、この分業こそ諸機能の多様性によつて、生産物の釣り合い、諸交換における均衡をもたらし、その結果われわれに富への道をひらく」ものだからであり、同様にそれは「人為、自然を問わずいたるところに限りなく見出されるものである」からとされる。そして分業を第一の局面に位置づけることは、人間およびもの事 (choses) の真の側面を出発点にすることであり、少しも恣意的なことではない、と主張される。⁽⁶⁰⁾

ところで、ブルードンの分業概念は、スミスと同じく、いわゆる工場内分業・社会内分業の両者を含んでいるばかりでなく、それ以上に労働一般の他の表現としてとらえられている。⁽⁶¹⁾ しかもその労働は、正義と平等を実現するものという理解がなされている。⁽⁶²⁾

したがつて、分業すなわち労働が理論体系の端初に置かれた理由はそれが平等の実現を約束するからだということにある。こうしてみると、分業↓労働を、端初として位置づけたものは、平等という理念であり、それ自身何らの展開の契機をもたない、分析を欠いた抽象的概念にすぎない。

かくして体系の出発点として労働をもつてきたにもかかわらず、その根拠が平等であるために、分業のカテゴリ、

はそれ以上に論理として展開の仕様がない。

また、たとえ、かかる労働が不充分ながら価値の実体としてとらえられたにしても、価値はそれ以上に現象形態としての交換価値あるいは価格に展開することはない。すなわち、ブルードンにあつては交換価値（実は価格）はその根拠を価値ではなく、主観（*opinion*）あるいは稀少⁽⁶³⁾さに求めているからである。価値はそこではこれとは独立に、空想的な労働貨幣の根拠にその存在理由を見出すに止まる⁽⁶⁴⁾。そしてこの断絶は価値と価格との機械的混同の裏がえしにすぎない。

ともあれ、端初それ自身の中に展開すべき契機がない以上、その展開の契機は外部に求めねばならなくなる。ここから、分類の原理にもとづく抽象的同一性の追求による連関が問題となる。そして、分業と機械を結びつけるものは、両者のもっている諸性質の一面を抽象化することによって得られた同一性ということになる。

ところで、こうした同一性が抽象されるためには分類基準が必要とされるが、この基準となるものが、実は前述の平等であり、あるいはかかる平等または正義の表現としての構成された価値である。

われわれはさきに、構成された価値の価値的側面が、現実の経済現象の説明原理たりえず、その理想価格（価値）の面のみが問題とされるとしたが、このブルードンの理論体系の端初となりえなかった価値は、実はかかる分類基準としての地位をその体系に対して持つ。

すなわち、それは現実的な経済現象の系列の背後にある与件、または仮定としての役割と、更には正義・平等の具象として、社会の進歩によつてやがて到達されるべき目標または理念となる⁽⁶⁵⁾。そしてこれによつて系列の進化（実は連続）に対する基準としての地位をかく得る。

したがつて、ブルードンが「（構成された）価値は経済機構（*édifice*）の礎石である⁽⁶⁶⁾」と述べるとき、それはも早

全系列体系の基礎にあり、その系列の諸モメントが、その価値の展開の各局面としてとらえられるという意味での礎石なのではなく、上述の基準としての意味での礎石であると云えよう。

かくして分業¹¹労働を系列の第一局面に位置せしめた平等の理念、その具象としての価値は、それ自身、展開の契機をもたないため、系列を展開させる実体たりえず、それは抽象的同一性の分類基準として経済的カテゴリーの外面的な連関をとりもつ。そしてこの連関を通じて、主題としての平等が追求される。

そこで次にそれを分業と機械との関係のなかでみることにする。

ブルードンによれば、産業の運動はつねに二律背反的な結果をもつものとされる。すなわち一方は「有用な効果」であり、他方は「覆滅的な諸結果」である。⁽⁶⁷⁾これを分業と機械についてみるならば、次の如きものである。

分業については、それは「それによって、諸条件、および知性の平等が実現される方法であり、……富への道をひらくもの」、「多産性 (fécondité) の第一条件」であるが、「進歩・富・平等を欠いた分業は、労働者を隷属させ、知性を無用にし、富を役立たぬものにする」⁽⁶⁸⁾かくて、「分業は、富の増大、労働者の熟練の第一の原因であり、魂の墮落、文明化した貧困の第一の原因である」⁽⁶⁹⁾

これに対し、機械は「細分化された労働者の回復、労働者にとつての苦痛の軽減、生産物の価格の低下、……新発見への進歩、一般的福祉の増加」⁽⁷⁰⁾をもたらし、それはまた人間の自然に対する支配によつて、「人間的自由の象徴」となり、「人間の権利の表現」となり、知性と結びついて平等へつながる。⁽⁷¹⁾ところで機械はこれと同時に、「労働の停止・賃金低下・過剰生産・破産・労働者の社会的地位の喪失・種 (race) の退化」等の覆滅的な効果をもつ。⁽⁷²⁾こうして機械は「分業と同じく、社会経済の現実的体系の中にあつては、富の源泉であると同時に、貧困のたえざる、宿命的な原因である」⁽⁷³⁾。

さて、以上が分業と機械の二律背反 (antinomie) と云われる積極面と否定面であるが、このアンチノミーは、分業においては、平等、あるいはそれにつながる正義・福祉の観点にもとづいて、それがもついくつかの側面が抽象されたものであり、機械においても同様の観点と、更にすでにみた機械の効果の説明を考え合わせるならば、平等が約束される構成された価値の実現状態、すなわち価値的側面がはじめて存在意義をもつ状態（それは混同されて、自然価格の成立状態とも考えられる）を基準にして各々の側面が抽象されていることがわかる。

ところで、分業と機械のカテゴリーは、この両者のアンチノミーの積極面について、その同一性を追求することによって関係づけられ、一つの系列体系を構成する。

すなわち、それは次の様な構造をもつ。

まず、分業の積極面を措定 (these) 否定面をその反措定 (anti-these) とし、この反措定を更に否定したもの、いわゆる否定の否定が機械の積極面とされる。これをブルードンの説明にみると、分業の否定面に対して、「機械は分割の反対であり」、「細分された労働者の回復、労働者にとつての苦痛の軽減」とされ、それは「分割された労働と殺人に對する産業の天才の抗議である」とされる。

かくして、分業の積極面とその否定の否定として機械の積極面が、いわゆる綜合によつて等価 (equivalence) または同一性の關係として結びつけられることになる。⁽²⁾

ここで注目すべきことは、後に解明される如く、反措定、綜合といつてもそれらが、各々、措定、反措定の中から必然的に導き出されたもの、すなわち、揚棄されたものではなく、あらかじめ抽象された同一性が前提されており、それがこのトリアーデによつて結びつけられていることである。

ともあれ、ブルードンはこの様にして、平等にとつての積極面を追求するカテゴリーの結びつきをもつて、経済的

進化と考える。

そしてこれはアンチノミーの基準としての価値の観点からするならば、構成された価値の成立、すなわち、価値による交換の実現状態、またはこの状態のもとの均衡と混同されている自然価格の安定した成立状態の追求を意味する。かくして経済的進化は、構成された価値、または平等の実現を目指すものと考えられる。

ところで、この経済的進化なるものが、実は進歩ではなく、単なる連続にすぎないものであることは明らかである。ブルードンが、かかる実質的内容である連続を進化と考へた理由は次のことにある。われわれはさきに、価値の実体的な根拠としての労働ではなく、平等・正義と結びついた労働が、ブルードンの理論体系の始元とされたことをみたが、かかる労働は、実は、一方では歴史的進歩の中軸(pivot)としてとらえられている⁽¹⁵⁾。ところが、労働は前述の如く、平等の理念に根拠をもとめることで、分類基準としての価値の中に解消した。したがって進歩もまた、かかる価値がカテゴリーの積極面を追求することを通じて実現されるものと考えられるに至ったものと思われる。

ともあれ、経済的進化がこの様に、平等あるいは価値の分類基準によつて抽象された外面的同一性の追求にすぎないことから、トリアーデと云つても、それが内容とするものは矛盾ではなく、同一性に対応した差別にすぎないものであるから、それは外面的同一性の連続を媒介する言語的手段の地位しかもたず、内的必然性によつて展開する過程とはなりえない。このことは、分業と機械のカテゴリーの關係が、質的發展、歴史的展開を含んだ立体的構造、すなわち揚棄の關係にないことに現われている。

そこで、最後にこの点を確認しておく。

ブルードンによれば「社会における機械のたえない出現は、分業の反指定、逆の定式である」として、機械とは結局「分割が分離したところの労働の種々の諸部分を結合する一つの方法(une manière)である」と規定される⁽¹⁶⁾。かか

る定義において、分業を労働の分割とするのはともかくとして、機械をその結合としてとらえることの意味は何なのか。

われわれはブルードンのかかる機械の定義は機械のもっている一つの機能を一面的に定式化したものとして理解できる。すなわち、分割された労働の結合とは、機械が規定する労働組織あるいは労働篇成の量的側面を述べたものにすぎない。詳言すれば、機械は、労働手段として、それ自身、労働力と結合するが、その際、その機械のもつ技術的条件によつて一定の質をもつた労働力編成が形成される。⁽¹⁸⁾ この労働力編成を量的側面からみると、労働(力)の結合としてとらえることができる。

こうしてみるとブルードンの機械の性質は、労働力の視点から把握されたものであり、ブルードンにとつての主体はあくまで、労働手段ではなく労働力にあり、この観点から労働力を結合する手段あるいは方法としての機械が問題とされたものと思われる。したがつてこのことから、ブルードンが機械を工場に置きかえる混同の意味もまた理解できる。すなわち、工場は、機械の技術的条件によつて編成された労働組織の体系とみることができるからである。⁽¹⁹⁾

この様に、労働力の視点から機械、そして機械制大工業を考へることは、ブルードンがマンユファクチュアリーの視点しかもつていなかったことを意味するが、このことは、機械制大工業とマンユファクチュアリーの質的差異、歴史的段階の相違をみないことに他ならない。すなわちブルードンは分業と機械を労働力の分割と結合として量的にとらえたが、これによつて、たとえブルードンが機械制大工業を、労働力の側面から把握したにしても、マンユファクチュアリーの協業とは異なつた規定性すなわち、技術的・社会的相違をみず、単に労働組織の量的な側面を抽象して、マンユファクチュアリーの労働編成と近代工業での労働編成とを同一視してしまつたものと云える。これは結局、道具と機械およびこれと結びついた労働編成の差異をみないことを意味する。

以上からブルードンにあつては、分業（マニファクチュアー的分業）から機械制大工業への発展の連関はこれを見ることができない。しかも、労働の結合という量的一面性しかもたない規定からは、機械のもつ特質は把握されないから、ブルードンの述べている様な機械のもつ積極面の諸規定と、労働の結合との関係は、不明確なままにされ、それは機械的に、分業によつて細分された労働者の回復、その他の倫理的見地に接合している。

さて、これまでのわれわれの分析から次のことが解明された。

すなわち、分業と機械は、ブルードンの理論体系の中のカテゴリーとして相互に連関しているが、(一)、ブルードンの方法における実体否定の立場により、構成された価値論を媒介として、実体としての価値によつてではなく、市場価格によつて、二つのカテゴリーが把握されていること、そしてこの結果、(二)、両者の関係は、同じくブルードンの方法における、外面的同一性による連関追求の立場から、価値の展開によつてではなく、平等の理念およびその具象としての価値が、分類基準とされ、それにもとづいて抽象された両者の外面的同一性の連続の展開として把握されるに至つたこと、以上である。

IV

マルクスが、『哲学の貧困』（一八四七年）の中で、これまでみてきたブルードンの価値論をはじめ、分業・機械について、かなりくわしい批判を行なっていることは、一般によく知られるところである。そこで、以上のわれわれの分析結果を、マルクスのこうしたブルードン批判との関連で検討し、もつて本稿での結論にかえることにしたい。

そのため本節では、マルクスがブルードン批判に当つて如何なる限界を示しているか、そしてその限界は、どのような方向で解決されようとしていたかについて検討する。

それにさき立ち、マルクスが『哲学の貧困』でのブルードン批判当時までに到達していた理論的段階を、価値論を中心に確認しておきたい。

マルクスが『哲学の貧困』でのブルードンの価値論・貨幣論・地代論等の批判に際して立っていた経済学的立場は、リカードであることは明らかである。ブルードン価値論批判に当って、マルクスがリカード価値論を擁護した理由は次のところにある。

すでに分析した如く、構成された価値は、スミスの経済現象の内的連関を追求する価値的側面と、もう一つの現象記述的なものに連る自然価格の側面を、投下労働と支配労働の混同によって「綜合」したものであった。これに対して、マルクスは、投下労働説を徹底させたリカード価値論を擁護して、費用説的側面をもったブルードンの価値論の混乱とあいまいさを鋭くついたのであった。マルクスはこの場合、ブルードンの投下労働価値説的側面を、「リカード価値論の空想的解釈」⁽⁸¹⁾としてとらえて批判したが、この側面は、リカードというよりむしろ、それ以前のスミスの価値の理想化であることは、すでにわれわれがみた通りである。⁽⁸²⁾ともあれ、このマルクスの批判は、構成された価値が、たまたまりカード価値論につながる側面をもっていたがために、その立場をより徹底したリカードによって批判したということではない。そうではなくて、このリカードによる批判は、『哲学の貧困』が書かれる以前の、マルクスの経済学研究ノートでの推移⁽⁸³⁾、それを裏付けたと思われる『経済学・哲学手稿』での疎外された労働の理論等による立場から、必然的に導き出されたものである。とくに、疎外された労働の理論は、マルクスが投下労働説を一貫させたリカード価値論の立場を擁護する必然性を示すものと云える。しかし、同時に、これらのマルクスの研究ノート・手稿等は、マルクスが無批判的にリカードの立場に立っていたものではないことを示している。

すなわち、疎外された労働の理論においては、自然的な労働過程の立場が貫徹され、⁽⁸⁴⁾これが投下労働価値説の肯定に結びつくものをもっている。ところで、マルクスの見解が、かかる労働の自然的過程の把握のみに止まるならば、

マルクスはリカードを克服できなかったであろう。しかし、このマルクスの理論には、もう一つの側面すなわち社会的な労働過程の把握がある。このように、疎外された労働の理論の中には、後の労働過程の二重性に対する把握がすでにみられる。⁽⁸⁵⁾

ところで、マルクスはこの段階では、私有財産を近代市民社会の本質としてとらえる見方をしている。⁽⁸⁶⁾ マルクスの場合、このとらえ方は、疎外された労働の理論を媒介として、私有財産・疎外された労働の生産物と考えられ、私有財産と疎外された労働は、内容的には本質と現象の関係として理解されている。⁽⁸⁷⁾ そして、当時のマルクスには、次の如き注目すべき見解が示されている。

すなわち、「疎外された労働」と「私有財産」の「二つの要因のたすけをかりて、いつさいの国民経済学的カテゴリーを展開することができる。そしてわれわれは、暴利販売・競争・資本・貨幣等々のどのカテゴリーにおいても、単にこの最初の基礎の、一定かつ発展した表現を再発見するばかりであろう。」⁽⁸⁸⁾ これは明らかに、この二要因 (Zwei Faktoren) によつて、古典派経済学のカテゴリー批判による経済学の再構成をマルクスが意図していたことを示している。このことは、前述の私有財産を近代市民社会の実体または本質としてとらえる立場と関連させて考察するならば、経済学のカテゴリーを価値という実体の展開としてとらえる方向をすでにこの段階で提起していたと云えよう。そして、こうした方向は、部分的にはあるが、『哲学の貧困』が書かれる直前に書き終えられていた『ドイツイデオロギー』における次の如き見解に、すでに展開されはじめている。

すなわち、ここでは、疎外された労働の生産物としての私有財産と、かかる労働の活動形態としての分業との関連にふれて、「分業と私有財産とはおなじ表現であり、おなじことが前者では活動について現わされ、後者では活動の生産物について現わされる」と規定されている。⁽⁸⁹⁾ ここでは明らかに、マルクスの分業は、私有財産としての生産物の

生産過程における労働形態として理解されており、それは後の、相対的剰余価値のカテゴリーの中で把握されるべき可能性をすでもつてゐる。これはすなわち、分業が価値論との関連で統一的に把握する方向がここで、すでに示されていることである。

こうして『哲学の貧困』に至る段階で、マルクスはすでに上述の如き理論的發展をとげているが、何と云つてもそれはまだ、マルクスの経済学の基礎としての史的唯物論の段階に止まり、経済学の理論としては、このマルクスの一面が、リカード価値論の擁護の立場に現われているにすぎない。そしてこのリカード擁護の段階は、マルクスの私有財産疎外された労働から、かかる労働を实体とする生産物⁹⁰価値、という認識への推移の過程に当るものと思われる。さて、ともあれ以上のマルクスの理論の到達段階が如何にブルードン批判を限界づけているか、それについてまずみることにする。

すでに分析した如く、ブルードンは彼なりに理論の体系を、系列の体系として構成していた。そして、この系列のモメントとしての経済的カテゴリーの展開は、实体としての価値が、その方法論に規定されて仮定、あるいは与件としての位置に後退しているため、カテゴリーにとつては外的要因にすぎず、したがって、カテゴリーの展開は、各々がもつてゐる性質を一面的に抽象した、いわゆる良い面、悪い面、という、抽象的同一性の追求を通じて行なわれざるを得ないということ、しかもこの場合、価値は与件としては、かかる抽象的同一性に対する基準的性格しかもちえない、ということ、そしてこのため、ヘーゲルのトリアードも、ここでは、内的連関を欠いた、外面的同一性を跡づける言語的手段以上に出ないものとなつてゐることが明らかにされた。

こうしたブルードンの「矮小化されたヘーゲル弁証法」の適用は、まさに实体としての価値を欠除するところにあつた。

ところで、マルクスのブルードン批判の限界は、次の事実、すなわちマルクスの構成された価値論批判が、同じブルードンの経済学の方法における、矮小化されたヘーゲル弁証法ならびにその適用例としての分業・機械等の批判と結びつけられていない、ということに示されている。このことは、ブルードンの価値論について、投下労働価値説としての不徹底さの批判はあっても、われわれがすでにみた如く、こうした投下労働説の不徹底さが、まさにブルードンのヘーゲルの方法の平盤な適用と必然的に結びついていることの理解が、当時のマルクスに欠けていたことを意味する。そしてこれは当時のマルクスの価値論が、リカードの水準を出ていなかったことからして当然である。

すなわち、さきに指摘した如く、マルクスには「ドイツイデオロギー」での分業と私有財産との関係にみられる如く、分業を相対的剰余価値のカテゴリのもとで把握するきざしはあっても、それはあくまでも部分的な萌芽にすぎず、いくつかの経済的カテゴリを価値論の展開としてとらえる立場、すなわち価値論にはじまる上向過程でのカテゴリ分析による展開と、それによって形成される理論体系を考えるまでには、当然のことながら到達していなかったからである。

このことは、理論体系の構成と、その体系に対してもつ実体としての価値の意義についての理解が、当時のマルクスの中で未成熟であったことを意味する。したがって、当時のマルクスには、ブルードンが体系の展開に当って適用したヘーゲルのトリアーデが、言葉だけのものであることの理由は、ブルードンが平等の理念を基礎にした立場をとっていたからだ、という批判はあつても、それ以上に、平等に代るべき実体としての価値を主張できなかったし、またそれが、価値でなければならないという指摘もなされないままに終っているのである。

かくして、この様な、マルクスの経済学研究の未成熟さがこの段階でのブルードン批判の限界を根拠づけているわけであるが、以上のマルクスの限界は限界として止まっていたであらうか。

われわれは、当時の批判には、かかる限界と同時に、すでにみたマルクスのこの批判以前に意図された方向からして、その超克の可能性もまた示されていると考える。しかも、重要なことは、かかる限界は、このマルクスのプルードン批判を通して、プルードンを批判するなかで克服され、それ以前に、マルクスが潜在的にもついていた理論体系への意図を、価値論と結びつけたかたちで、より具体的にそしてまたより積極的に志向するに至ったであらうということである。

このことはこの著作での価値論の重視と、ヘーゲル摂取の態度に現われていると云える。そこで、最後にこの点について検討しておく。

まず、価値論が、理論体系の中でもつ重要性の認識のあらわれとしては、『哲学の貧困』の著作全体の中で、価値論批判がその大半を占めていることに示されている。

ところで、われわれがさきほどマルクスの限界として示した、プルードンが体系の展開の基礎に、抽象的な平等という理念をもっているという批判は、前述のマルクスの潜在的な理論段階からして、これを裏返しにすると、そのマルクスは、体系の基礎に唯物論的な実体としての価値の必要性を感じており、それを批判の中で云わないにしても、マルクス自身、考えはじめていたとも云える。そしてこれがかかる価値論批判の全体に対する比重となつて現われたのではなからうか。

ともあれこのことは、次のヘーゲル摂取の志向を考え合わせるならばより明確となる。

そこでヘーゲル摂取の方向について次にみるならば、それはマルクスが、プルードンの中に、実際以上にヘーゲルの幻影をみようとした態度にうかがうことができる。

すなわち、プルードンの、経済理論を一つのカテゴリの体系として構成する立場は、フリーエにその源流を見出

すことのできる系列の考へに基礎をおくものであった。そして、それはヘーゲルの体系とはほとんど異質的な、いわば悟性的段階での量のカテゴリの一般化をその哲學的基礎としてもつものであった。

ブルードンのヘーゲル的な觀念論を「ま、ぜ、も、」にする基盤は、かかる悟性的認識を、平等・正義等の抽象的な理念と結びつけようとしたところにあった。しかし、われわれがみた限りでも、その場合のヘーゲルは、あくまで粉飾的位置しかもたず、実質的な論理構造は、系列の理論にその方法的支柱を見出していたのである。ところが、マルクスは、かかるブルードンの方法論である「系列の弁証法」がヘーゲルと實際的に、関連していると考へ、周知の如く、とくにヘーゲル主義・ヘーゲル弁証法のブルードンでのあり方を強調し、これに対し、痛烈な批判を行なっているのである。

かかるマルクスの態度は、如何に理解すべきであらうか。

それは、マルクスがこの批判を執筆した時期が、ヘーゲル觀念論批判を完了した直後⁽⁹³⁾という事情も考慮されるが、それ以上に、マルクスが、ヘーゲル撰取の問題を考へはじめていたからではあるまいか。したがって、そこでのブルードン独自の体系を、マルクスはヘーゲル的な体系の歪曲としてとらえようとしたのではなからうか。

かくして、マルクスは、ブルードンを、誤解⁽⁹⁴⁾することによって自らの方向をその批判の中で確認しようとしたと云えよう。そしてこのことが可能であつたのは、ブルードン自身、理論を体系としてとらえると云う点で、マルクスに對する距離の近さをもっていたからである⁽⁹⁵⁾。その意味で、ブルードンのこの段階でのマルクス經濟學の形成過程における地位は眞のヘーゲル弁証法の唯物論的把握による、マルクス独自の經濟理論体系への發展に際しての、否定的な踏石であつたと云えよう。

ともあれ以上のことから、われわれは、マルクスの志向を次の如く結論づけることができよう。

すなわち、当時のマルクスは、本稿で分析したブルードンの、系列の方法による理論体系の批判を通じて、次の如き考え、つまり、マルクス自身の経済学体系を、当時すでに到達していた史的唯物論の立場から、積極的なヘーゲル論理体系の真髓の摂取によつて構成すること、そしてその体系を貫く実体は、抽象的な理念ではなく、唯物論的な実体としての投下労働価値であるということ、こうした考えをもつ様になつたのではあるまいか。そして、こうした考えの基礎に立つて、マルクス自身の体系を展開するための、価値論を基軸とした経済学研究へと向つたものと思われる。そして、この志向は、ほかならぬ、マルクスの経済理論形成過程での『哲学の貧困』の位置を、一八五〇年代の経済学批判のための研究への展望につながるかたちで示すものといえる。

註

- (1) 『哲学の貧困』の評価については、この書を結果的に、史的唯物論の諸観点が展開されている労作としてのみ見るF・メーリングに代表される立場(F・メーリング「カール・マルクス」第一巻・大月書店)と、これを批判し、この書の中にマルクスの経済学的カテゴリーおよび経済法則の分析をのみようとする、ローゼンベルグに代表される立場(ローゼンベルグ「初期マルクス経済学説の形成」大月書店)がある。メーリングは論外としても、ローゼンベルグにおいては、マルクスの積極面を評価しながらも、ブルードン分析を欠いているため、マルクスの批判の真の意義を把握できず、したがって、一八五〇年代のマルクスの経済学批判につながる展望をこの書の中に見出せないままに終っている。

- (2) かかる見方は、マルクスの批判にもとづいてみる常識的なものから、ブルードン自身が自己の思想の三大源泉として語った「聖書、A・スミス、ヘーゲル」にもとづいてそれをそのまま容認する立場にみられる。^{*}これに対して、ヘーゲルの影響をみとめようとする立場も古くからある。

^{*}(1) P. Hauptmann: Marx et Proudhon, 1947, pp. 27-28.

(2) G. Guy-Grand: Pour connaître la pensée de Proudhon 1947, p. 43.

(3) E. Droz: P. J. Proudhon, 1909, p. 139.

ブルードンにおける分業と機械 佐藤

※(1) Sainte-Beuve: P. J. Proudhon, sa vie et sa correspondance 1873, p. 223.

(2) D. Halévy: P. J. Proudhon, 1948, p. 389.

(3) マルクス、シュヴァイツァー宛の手紙（一八六五年一月二四日付）（高木佑一郎訳『哲学の貧困』一九四八年社会主義著作刊行会246頁）参照。

(4) P. J. Proudhon: De la création de l'ordre dans l'humanité ou principes d'organisation politique. 1843. [テキスト] Œuvres complètes de P. J. Proudhon, nouvelle édition 1927 (Marcel Rivière). 以下、本稿ではCréationと略す。

(5) 『秩序の創造について』の主要なテーマは、第三章形而上学で展開されている。この「系列の理論」である。この理論は、創造されるべき新しい科学、とくにブルードンの「経済科学」の方法として意識的に追求されている。（cf. Création, p. 131, pp. 295-296）。

(6) ブルードンは、このフリーエについて「系列の法則の発見者はフリーエであった。……彼は系列の一般的な考え (l'idée) をもった最初の人であった。」しかし「フリーエは系列の理論を知らなかった。」としている。（Création, p. 166）なお、こうしたフリーエのブルードンに対する影響については、それを非常に大なるものであるとするブルジャンをはじめとした見解が多々ある。（Bourg: Fourier 1905, p. 574）。

(7) ブルードンのこの理論が展開されている「形而上学」と題する第三章はカントのフランス語への翻訳家であるティソー (Tissot) に捧げられる予定であった。（Sainte-Beuve, op. cit. p. 150）ブルードンは、カントについては、彼は系列の法則を不完全にしか認識していなかったが、しかし、この著名な形而上学者は、系列の法則にはたえず近接していた、としている。（Création, p. 144）この様にカントへの心酔は非常に深いものとされている。（G. Guy-Grand, op. cit., p. 43）。

(8) cf. Fourier, Texte choisis (édit. sociales) 1963, pp. 51-55, Bourg, op. cit., p. 275.

(9) フリーエ・副田満輝訳『四運動の理論』（河出版世界大思想全集）148頁訳註、参照。

(10) ヘーゲル『小論理学』（松村一人訳）98～100節参照。

(11) カント『純粹理性批判』（天野訳・岩波文庫上巻）第一篇、第一章、第三節参照。カントにおける量のカテゴリーは時間系列 (Zeitreihe) あるいは数によって示される。そして、それは単一性、数多性、全体性としてとらえられる。また、カントの量は一切の質的なものを排除しているわけではない。なおカントは、量の一般化に対しては批判的立場をとっている。（第二版追加参照）

- (12) ヘーゲル『大論理学』(武市訳・岩波書店改訳版) 上の二、33と34頁参照。
- (13) 前掲書31と32頁参照。
- (14) *Création*, p. 137. プルードンはこの少し後で、「系列は科学それ自身を創造するものとして、科学の至高の条件である」(p. 139)と述べている。
- (15) *Création*, p. 131. プルードンが考える科学の二つの条件とは、(一)、量あるいは算術の対象の分割、(二)、分割された量の群による区別。以上である。(cf. *Création*, p. 132).
- (16) *Création*, p. 268. これがカントによるものであることは明らかである。なお註(11)を参照のこと。
- (17) *Création*, p. 141.
- (18) *Création*, pp. 171-172.
- (19) ヘーゲル『大論理学』前掲書29頁参照。
- (20) ヘーゲル『小論理学』前掲書117節参照。
- (21) *Création* のテキストの註解者 Cuvillier は、プルードンの系列を考えさせたものは、自然科学の進歩、とくに動物学、植物学であつたやうと註記している。(cf. *Création*, p. 215, N.B. (162)).
- (22) 経済学の方法は「系列の弁証法、または観念の分類の方法である。……諸観念の系列は、経済学の道具であり、その体系あるいは組織は、(こうした諸観念の) 諸定式的変形によつてもたらされるであらう」(*Création*, pp. 285-286).
- (23) *Création*, p. 182. プルードンはこの抽象について色、音、そして動植物の分類を例に上げて説明している。また、「この系列は、人間の言語の大部分を構成している」(p. 184)とも云われる。
- (24) 「推理とは分類のことである。それは異なつた二つの部分を理解する操作である」(*Création*, p. 235).
- (25) *Création*, p. 196.
- (26) *Création*, p. 285. なおここで、「観念的系列においては諸単位は置換され、他の系列として形成され、それらの本質を破かいすることなく、一方が他方に変えられうる」とされる。
- (27) *Création*, p. 199.
- (28) *Création*, p. 206.

ブルードンにおける分業と機械 佐藤

(29) ヘーゲル『小論理学』117～119節参照。

(30) *Création*, p. 201.

(31) *Création*, p. 205.

(32) *Création*, p. 215.

(33) *Création*, p. 204.

(34) *Création*, p. 207.

(35) ブルードンの数学的な立場が十八世紀フランス唯物論の伝統に立っていることは明白である。(ヘーゲル『小論理学』前掲書99節補遺参照)「人間は経験による以外は少しも知ることはない」(p. 205)「感覚が明らかにするところのものは、理性が考えるところのものに妥当する」(p. 283) Cuvillierによれば「ブルードンの全努力は、カテゴリーの概念を、系列の概念におきかえることであり、その系列を経験に接合するところであった」といわれている。(cf. *Création* p. 144, N.B. 123). また、コントの認識の三段階論との共通性も指摘される。(cf. G. Guy-Grand, op. cit., p. 34, *Création*, pp. 17-18).

(37) ブルードンはこの *Création* の段階ではクーザルを知らなかつた。(cf. *Création*, pp. 19-20) クーザルは一八四五年以後にグリーン、ヘルヴェークを通じて学ぶことになる。(cf. D. Halévy, op. cit., pp. 366-368). なお註③を参照のこと。

(38) *Contr.** tome I, p. 138, p. 179, tome II, p. 394, etc.

* P. J. Proudhon, *Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère* 1846 [「ミゼラン」] (*Œuvres complètes de P. J. Proudhon nouvelle édition*, 1923, tome I-II, [Marcel Rivière]) 以下 *Contr.* と略す。

(39) ブルードンにおいては、交換価値=稀少性=需要、使用価値=豊富性=供給と考へられており (cf. *Contr.* tome I, chap II §1, マルクス『哲学の貧困』(国民文庫版) 61頁参照)、「この交換価値 (需要) と使用価値 (供給) の斗争の結果、両者の統一としての構成された価値が生まれる」。(cf. *ibid.* p. 95, p. 100, p. 135). この様に「需要と供給、これこそが交換の唯一の規準である」(*ibid.* p. 103). そして「この需給の均衡にちかいつて構成された「価値は、つひ合ふのとれた関係である」(*ibid.* p. 105). ところが、この「価値」はブルードンにこうした均衡をもたらすものとして、一般的に労働を考へてゐる。そして後にみる如く、この労働は支配労働と結びつき、市場価格としての均衡価格を実質上意味することになる。

(40) *Contr.* tome I, p. 177.

- (41) スミスの自然価格について述べた後、ブルードンは、J. B. セーが、この需給の二律背反をより経験的に (*sensible*)、またより純粹に (*nette*) に表現した、としている。(ibid. p. 177). なお、ブルードンの価値論と J. B. セーとの関連については後のマルクスの指摘がある。(マルクス「資本論」第2巻、第3篇、第19章、(青木文庫版) 第7分冊、510頁参照)
- (42) Contr. tome I, pp. 106-107, p. 113.
- (43) P. J. Proudhon, Qu'est-ce que la propriété? ou recherches sur le principe du droit et du gouvernement, premier mémoire, 1841. [テクニクは、Ouvres complètes, de P. J. Proudhon, nouvelle édition 1926 (Marcel Rivière.) 卷1, 1^{er} mémo. 2^{de} 部。ブルードンはこの著作で、「事物の絶対的価値は、それに費された時間と費用 (*dépense*) に比例する」(1^{er} mémo. p. 231) である。
- (44) cf. 1^{er} mémo. p. 221.
- (45) cf. 1^{er} mémo. p. 255.
- (46) 『財産とは何か』では、労働材料の有限性、万人の平等の権利という観点から、各生産者は、社会の全生産物量 (= 全労働量) をその社会の労働する全成員で除した部分に等しい権利を、各人の生産物に対してもつ、とされる。(cf. 1^{er} mémo. p. 222, p. 240, p. 278, etc.). この様な平等主義に基礎づけられて、需給一致が前提されるが、この前提は、ブルードンの労働貨幣にみられる如き、交換価値の把握の欠除と結びついている。(註64参照)
- (47) ブルードンにおけるスミスの地位は非常に大であり、(註(2)参照) 一八四二年に書かれた『財産所有者への警告』の約半分は、『国富論』の抜粋である。また一八四二年の『……秩序の創造について』の中でも、スミスにもとづいて労働を基礎にした経済学を考えている。(Création, p. 293). この様な事実からして経済学上のブルードンに対するスミスの影響については多くの指摘がある。(cf. A. Berthod, op. cit., pp. 58-62, G. Guy-Grand op. cit., p. 19, G.D.H. Cole, A History of socialist thought, 1953, Vol. I, p. 213, etc.).
- (48) cf. Contr. tome I, p. 95, et N.B. 14. 実際的には、こうした仮定としての性格から、構成された価値が、結果から推定した観念的事実として現実に関きかけているという見方をとっている。
- (49) cf. 1^{er} mémo. pp. 221-222, pp. 255-257. なお、構成された価値の混乱が投下労働と支配労働の混同視にあることは、マルクスの指摘するところである。(『哲学の貧困』(国民文庫版) 81頁参照)

(50) 遊部久蔵『古典派経済学とマルクス』(昭和30年)第二章参照。

(51) 『社会における正義は、諸価値の均衡以外の何ものでもない』(Contr. tome I p. 109). 「諸価値の計測、あるいは均衡の理論は、……まさに平等の理論である。」(ibid. p. 114). そして、「正義はその表現として価値をもちつゝる」(Contr. tome II p. 397).

(52) この理論は『財産とは何か』で最初に展開され、この著作の基礎にある重要な考えであることは、ブルードン自身が述べているところである。(cf. Sainte-Beuve, op. cit. p. 90). そして、これはその後、『……秩序の創造について』(Creation, pp. 301-302). また、『諸矛盾の体系』において(Contr. tome I, p. 271). も問題とされるが、いずれも、『財産とは何か』の説明を引用している。本稿でも、その説明を『財産とは何か』によって行なう。

(53) cf. 1er mémo. p. 215.

(54) 『諸矛盾の体系』では直接的に価値論との関連では、「労働の剰余」において説明されるが、(cf. Contr. tome I, chap 2, § III, ここでは利潤かく得の主体が「人としての社会」となっているため利潤の源泉はここでは不明である。なお『哲学の貧困』(国民文庫版) 127頁以後参照のこと。

(55) 1er mémo. p. 175. これがいわゆる「全労働収益権の思想を現わすとされる「労働者は彼の賃金を受けとった後においてさえも、彼が生産した物に關して財産の自然権を保留する」(1er mémo. p. 212)という立場と結びつくが、この場合のブルードンが、生産物または使用価値と投下労働を同一視した、構成された価値の価値的側面からこれを考えていることは明白である。そしてこれが流通過程に利潤を求める市場價格的側面と混同されていることは上述の説明をみれば同様に明らかである。この限りでは、メンガーが、ブルードンの「計算違いの理論」を考慮していいないとするベルトの批判は妥当するものと云わねばならない。(cf. A. Berthod, op. cit. p. 71, N.B. (1)). なお、ブルードンの利潤の源泉に關して後のマルクスの指摘がある。(マルクス『資本論』第3巻、第1篇、第1章、第7篇、第7章、青木文庫版、第8分冊、89頁、第13分冊118頁、註148参照)。

(56) Contr. tome I, pp. 192-193.

(57) 註148参照。

(58) Contr. tome I, p. 197.

(59) Contr. tome I, p. 198.

(60) cf. Contr. tome I, p. 138.

- (61) プードンは、マルクスの『哲学の貧困』に対する反論を、その余白に書き込んでおり、本稿で使用した新版の第二巻にそれが附録として収録されているが、それによるとマルクスのプードンの分業批判（『哲学の貧困』（国民文庫版）188頁）に対して、「私の考えでは、A・スミスよりもっとさかのぼり、それはより広い意味に理解される」（Contr. tome II p. 422.）としている。また、労働一般との関連では、「労働を分割と結合の両側面からとらえ、分業はこの分割に当るとする立場がある」（cf. Creation, p. 296）。

- (62) この考え方はすでに、『財産とは何か』においても、また『……秩序の創造について』でも主張されている。（cf. 1^{er} mémo. p. 306, Creation p. 413）. また、『諸矛盾の体系』では構成された価値を媒介にしてそれは主張されている。（註51参照）この様に労働をやることはプードンの中に自然法思想が流れていることの一つの現われである。

- (63) cf. Contr. tome I, pp. 90-91. 註39参照。

- (64) これはプードンの交換価値の把握の欠陥によることは明らかである。（マルクス『経済学批判』（国民文庫版）95頁、『資本論』第2巻、『哲学の貧困』の各々のエンゲルスによる序文を参照）なお、プードンの労働貨幣は、理想価値としての構成された価値による現存社会における正義実現のための実験だったと云える。

- (65) cf. Contr. tome I, p. 136, tome II, pp. 397-398. なお註51参照。

- (66) Contr. tome I, p. 90.

- (67) Contr. tome I, p. 169.

- (68) Contr. tome I, p. 138.

- (69) Contr. tome I, p. 140.

- (70) Contr. tome I, p. 171.

- (71) Contr. tome I, pp. 174-175.

- (72) Contr. tome I, p. 188.

- (73) Contr. tome I, p. 181.

- (74) プードンは対立するものの統一として綜合をヘーゲルとは違って、均衡（équilibre）としてとらえる独特の立場をっており、後になってプードン自身それを明言している。（cf. G. Guy-Grand, op. cit., p. 45）。

ブルードンにおける分業と機械 佐藤

(75) cf. *Création*, p. 413. 同様に労働による進歩を考える立場は、歴史観としても確立されている。(cf. *Création*, p. 381).
(76) 註(29)参照。

(77) *Contr. tome I*, pp. 170-171.

(78) マルクス『資本論』第1巻、第4篇、第13章(青木文庫)第3分冊630頁参照

(79) 「第一のもっとも簡単な、そしてもっとも強力な機械は工場である」(*Contr. tome I*, p. 191). なお、この混同についてのマルクスの批判(『哲学の貧困』(国民文庫版) 179頁)は、ブルードンとしては納得できなかったと思われる。また、マルクスの分業と機械の同時的発達を述べて批判したこと(『哲学の貧困』(国民文庫) 186頁)に対してブルードンが、「これまたその通り。これらすべては同時に本当のことだ。」と書き込んでいる(*Contr. tome II*, p. 421). のは、この様に機械ということで、機械制大工業の労働組織を考えていたからであろう。

(80) マルクス『資本論』第1巻、第4篇、第13章、(青木文庫)、第3分冊610頁参照。なお、このことは「マニユファクチュア時代の包括的経済学者」としてのA・スミスのブルードンにおける影響の大きさを示すと同時に、価値論にみられたのと同じくブルードンの当時置かれていた条件、すなわち、当時のフランスの小商品生産の発達を反映するものと云える。

(81) マルクス、シュヴァイツァー宛手紙(高木訳『哲学の貧困』社会主義著作刊行会、248頁)。

(82) マルクスのブルードン価値論に対するこの様な規定は、ブルードンが、リカード派社会主義者と極めて類似した主張を行っていたことからなされたものであろう。そしてたしかに、労働貨幣に関する限り理論的には同一である。また、リカード派社会主義者との関連については、彼らがリカードよりも、むしろスミスにその源流を発するところから(白井厚『W・トムソンの分配論』三田学会雑誌、51巻、2号、65頁参照)その事情は了解されよう。

(83) ローゼンベルグ、前掲書、第三章参照のこと。

(84) この立場が最も明確に現われたのは、『ドイツイデオロギー』においてであるが、すでにこの「疎外された労働」の理論においても、特殊的なかたちではあるけれどもそれは示されている。すなわちそれは労働の疎外が類(*Gattung*)からの、そして人間からの疎外として把握されることにおいて、すでに人間の存在と労働または生産との関係の指摘(『ドイツイデオロギー』「フーイエエルバツハ参照」)を含んでいると云える。

(85) 遊部久蔵『価値論と史的唯物論』(昭和26年)第1章、第3節参照。

(86) これはエンゲルスの『国民経済学批判大綱』の中心思想でもある。エンゲルスの立場は、この私有とそれにもとづく競争が問題とされている。(大月版選集補巻5、214頁参照)

(87) 『経済学・哲学手稿』(大月版選集補巻4、296～297頁、299～303頁、312～313頁参照) この点がエンゲルスと異なった点であり、この疎外された労働を媒介にすることで、エンゲルスの競争、市場価格によるとらえ方から、リカード価値論の肯定へとマルクスは推移したものと考えられる。(ローゼンベルク、前掲書、86～87頁参照)

(88) 『経済学・哲学手稿』(大月版選集補巻4) 312頁。

(89) 『ドイツイデオロギー』(岩波文庫) 43頁。なお、『ドイツイデオロギー』での分業概念の分析については拙稿(唯物論、第10号、(札幌唯研)一九六一年所収)を参照。

(90) この価値に対する認識は、『グランドリッセ』、『資本論』等での認識に比較すれば、まだ内容をもたない(下降過程をもたない)いわばヴィジョンの段階と云える。また、この価値が交換価値、商品との関連でとらえられていたかどうかは不明である。

(91) マルクス『哲学の貧困』(国民文庫) 155頁、163～164頁参照。

(92) マルクスは、すでに『ドイツイデオロギー』の中で、系列の弁証法についての論評を行なっている。それによると系列の弁証法とヘーゲルとは、「思惟過程」を出現させる方法を与えようとする試み」について、実際的に関連をもつとされている。(cf. Marx

(93) Engels Werke Bd. III S. 519. 唯研訳746～747頁)

(94) マルクスは一八四四年の夏に『経済学・哲学手稿』で、ヘーゲルの『精神現象学』批判を行ない、『ドイツイデオロギー』(一八四六年)では、ヘーゲル左派の批判を通じて自己の唯物論的立場を積極的に打ち出している。なおマルクスがブルードンに会ったのは一八四四年秋であり、(P. Hauptmann. op. cit. p. 43). マルクスがブルードンに注ぎ込んだヘーゲル主義の内容とは、ヘーゲル観念論というより、その批判であったと思われる。

マルクスのブルードンに対する誤解は『財産とは何か』に対する評価においてもみられる。マルクスは私有財産と経済現象を本質と現象との関係として概念的に把握しようとしていた。(註87参照) そして『財産とは何か』はまさに、かかる把握を試みたものとして、「フランス労働者階級の科学的宣言」とされた。(マルクス「聖家族」大月版選集補巻5、21頁) しかしブルードン自身後に述べている如く、この著作での方法は、「系列の理論」にもとづくものであって、(Creation, p. 244) 論理構造としては、財産は、平等の支配する状態、すなわち等労働交換の均衡を破壊する外的要因としてとらえられていたのである。このこと

ブルードンにおける分業と機械 佐藤

- (95) からも、明らかな様にマルクスの評価は自己の問題意識の投影、すなわち、ブルードンの誤解の上に立てられていたと云える。水田氏の指摘されるマルクスとブルードンの距離の近さとは、具体的には、かかる内容でなければならないのではあるまいか。
(水田洋・水田珠枝、社会主義思想史、昭和33年、208頁参照)